

国庁周辺に広がる集落遺構の性格について

—武蔵国庁周辺の状況をもって—

荒井健治

-
- | | |
|-------------|------------------|
| 1. はじめに | 2. 『武蔵国府関連遺跡』の立地 |
| 3. 武蔵国庁について | 4. 国府集落について |
| 5. おわりに | |
-

論文要旨

武蔵国府において、下野などで検出されている「コの字型」に配された建物群、すなわち国庁ははまだ検出されていない。そこで府中市においては、この存在を求め現在までに800箇所（平成6年10月現在）を越える発掘調査が行われた。その成果は、直接的に国庁を究明するものではなかったが、多くの調査地区で竪穴住居跡・掘立柱建物跡を中心とする奈良・平安時代の遺構が検出され、国庁周辺には、古代の遺構群が極めて高密度で、かつ広範囲に存在することが明らかとなった。そこで本稿では、開発行為という調査者が関与できない要素、言葉を替えるならばほぼ無作為に抽出された約800地点のデータを用い国府集落の規模を数値化等で表現し、一般的な集落遺跡と集落規模のほか、遺構・遺物面から差別化できえるかの検討を加えた。

結果、国府集落は街並としては、旧来言われた都の縮小版的イメージは見いだしがたいが、初期の段階から広大な規模をもった集落として出現し、遺物面でも一般集落に対して優位性が認められ、さらにはその優位性もさることながら、それを機能させるための施設と考えられるものの存在も見いだされるに至った。

以上のことから、国府集落は、地方支配の拠点としての国府が必要性から生み出した集落であると、指摘できるものと考ええる。